

天草方言で詠む【万葉集】 鶴田 功〈訳文〉

万葉集は、7世紀後半から8世紀後半にかけて編まれた、現存するわが国最古の歌集で、全20巻からなり、約4,500首の歌が収められています。

万葉集の編纂については、詳細不明ですが、数人の人の手を経て、最終的には大伴家持の手によって20巻にまとめられたのではないかとされています。

古典を紐解き、現代人が失いかけている万葉人の精神文化や、日本の原風景に触れてみたくて、万葉集の原文を天草方言に訳してみました。

〈太字は原文〉

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山

登り立ち 国見をすれば 国原は 煙 立ち立つ

海原は 鷗 立ち立つ うまし国そ 蜻蛉島 大和の国は (舒明天皇 巻1・2)

大和にゃ ぎょうさん山のあるばってん とりわけ美しか天の香具山に登って

国を見わたせば 里野には 竈の煙があちこちから立ち上って

海原にゃ 鷗が飛び交うとる まこてよか国ソ この大和の国は

※「煙」は煙 天草方言「けぶり」 ※「かまめ」は、カモメ

※「蜻蛉島」は、「大和」に掛かる枕詞 蜻蛉はトンボの意

※ 枕詞とは、主として歌に見られる修辞で、特定の語の前に置いて語調を整えたり、情緒を添えることばのことである

山越の 風を時じみ 寝る夜落ちず 家なる妹を かけて偲びつ (軍王 巻1・6)

山を超して 風ン時ならず吹いて来るけん ひとり寝る夜毎夜毎

家に残えとる妻のことが 気掛かりで思い慕うとりますと

※「ぬる」は、寝る 天草方言「ぬる」 ※「妹」は、「妻・奥様・恋人」

君が代も 我が代も知るや 岩代の 岡の草根を いざ結びてな (中王命 巻1・10)

あなたの命も私の命も ここ磐代の岡の心のまま そこに生えとる草を結ぼうだ

そして命の無事を祈ろうだネ

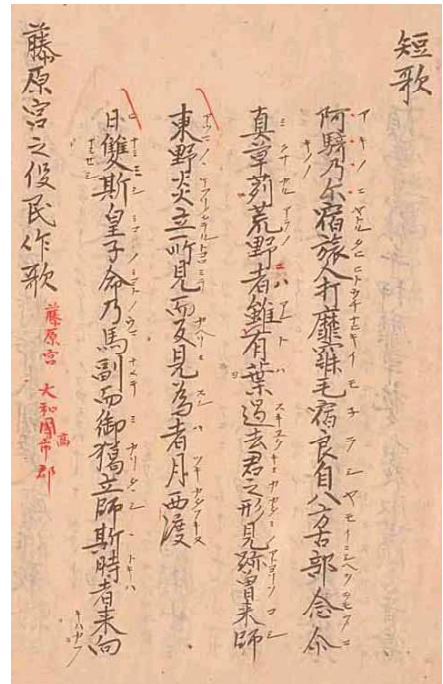
あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る (額田王 巻1・20)

紫草の生えた 天皇領地の野原を歩いとるとき あなた様が私に 袖を振ってる

(求愛なさる) ところを 野原の番人に見られとるかも知れんとに…

※「あかねさす」は、「紫・日・昼」に掛かる枕詞 ※「紫野」は、紫草(染料)を栽培した平野

※「標野」は、御料地 ※「袖振る」は、意志を伝える(求愛)・人の魂を鎮める



紫草の にほへる妹を 憎くあらば 人妻ゆゑに あれ恋ひめやも (大海人皇子 巻1. 21)

紫草のごて美しかあなたを 憎っかとなろば 何で 人妻のあなたを 恋するもんかネ
なんさま あなたが可愛ゆうして 好きだもん

よき人の よしとよく見て よしと言ひし 吉野よく見よ よき人よく見つ (天武天皇 巻1. 27)

昔の立派な方が よか所ちゆうて ゆうっと見て 素晴らしかちゆわした
何さまこの吉野をゆう見てみろネ 今の善良なあなたたちも ゆうっと見てみなっせ

春過ぎて 夏来たるらし 白妙の^{しろたえ} 衣ほすてふ(ほしたる) 天の香具山 (持統天皇 巻1. 28)

春が過ぎて もう夏が来たごたる 聖なる香具山辺りにゃ
真っ白か衣を いっぴゃ乾してある

※「白妙の」は、「衣・袖」に掛かる枕詞 (楮の繊維で織った白い布)

楽浪の^{ささなみ} 志賀の大わだ 淀むとも 昔の人に またも逢はめやも (柿本人麻呂 巻1・31)

志賀の大きか入江ン水は 流れんで淀んどるばって
時の流れと共に過ぎ去った昔ン人達にゃ 再び会うことンあっどかい
いんにゃ もう逢えんかもしれん

いつくにか 舟泊てすらむ 安礼の崎^{あれ} 漕ぎたみ行きし 棚なし小舟 (高市黒人 巻1. 58)

今ごろ どこに舟泊まりしとっとじゃろかい 安礼の崎を 漕ぎ巡って行た
あん舟棚も無か 小か舟は ※「安礼の崎」(愛知県宝飯郡御津町)

いざ子ども はやく日本へ^{やまと} 大伴の^{おほとも} 御津の^{みつ}浜松 待ち恋ひぬらむ (山上憶良 巻1. 63)

さあ皆の者ども 早う日本さん帰ろだ 大伴の御津の浜ン松原も
我々を待ち焦れとるこっじゃろう

※山上憶良は、文武天皇の大宝元年(701年)に遣唐大使・粟田真人に随行し、
3年ほど滞在した

草枕 旅行く君と 知らませば 岸の黄土に にほはさましを (清江娘子 巻1・69)

旅のお人じゃんすとを 存じ上げとれば 岸の黄土で あなた様の衣を
染めて差し上げましたとに まこてマ

飛ぶ鳥の 明日香の里を 置きて去なば 君があたりは 見えずかもあらむ (元明天皇 巻1・78)

明日香の古京を 後にして 行たてしもうたら
あなたの辺りは 見えンごてなりゃせんどかね

※「飛ぶ鳥の」は、「明日香」に掛かる枕詞? (奈良県高市郡明日香村)

かくばかり 恋ひつつあらずは 高山の^{いわ}磐根し^ま枕きて 死なましものを (磐姫皇后 巻2・86)

こがん 恋い焦がれとるよりか 高山の岩を枕にして
いっそんこて 死ねばよかったて まこて

ありつつも 君をば待たむ 打ちなびく わが黒髪に 霜の置くまでに (磐姫皇后 巻2・87)
こんまますと あの人バ待とうバイ ふさふさとしたこの黒髪に
白髪の混じるまででん

居明かして 君をば待たむ ぬばたまの 我が黒髪に 霜は降るとも (磐姫皇后 巻2・89)
こんまます夜明けまで ずっとあの人を待とう 私の黒髪が たとえ白髪になったっちゃ
※「ぬばたまの」は、「夜・黒・黒髪」に掛かる枕詞

妹が家も 継ぎて見ましを 大和なる 大島の嶺に 家もあらましを (天智天皇 巻2・91)
逢えんとなろば せめてあなたの家を いつでん見られたろばなあ 大和の大島ん山頂に
私の家があればよかったとに そっからなろば いつでんあなたの家を
見らるっちゃって

秋山の 樹の下隠り 逝く水の われこそ増さめ 思ほすよいは (鏡王女 巻2・92)
秋の山の樹の 下を隠れて流るる水が 秋にはうんと水かさを 増すごて
私のほうが ずっとあなた様を 思うとりますとヨ
あなた様が私を 思ってくださいるよりかも ずーとずーと

玉櫛笥 覆ふを易み 開けていなば 君が名はあれど わが名惜しも (鏡王女 巻2・93)
美しか櫛箱に蓋をするごて 二人の仲を覆い隠すとは 簡単ち おっしゃいますばって
あなた様は 浮き名が立っても構わんでしょうが 私ゃ困ります 嫌ですばい
(どうぞ 夜の明けんうちに 早よ ここを出て行ってくださいませ)
※「玉櫛笥」は、「覆う・あける・三輪」に掛かる枕詞 (櫛笥は化粧箱)

玉櫛笥 三輪の山の さなかづら さ寝ずは遂に 有りかつましじ(藤原鎌足 巻2・94)
三輪の山の さなかずらの名にあやかって 木にぴったり巻き付いて
いつまでん あんと共寝していたかさね ※「さなかづら」は、「共寝」の掛詞



※ 掛詞とは、同じ音、あるいは類似音のことばに、二つ以上の意味を込めて表現する方法

水篋刈る 信濃の真弓 我が引かば 貴人さびて 否と言はむかも (久米禅師 巻2・96)
あなたの袖を引けば 淑女ぶって イヤッチ 言うちゃろうネ

※み薦刈る信濃の真弓は、袖を引く(求愛)の誘導語 ※「弓」は、「引く・張る」の掛詞

水篋刈る 信濃の真弓 引かずして 強ひざるわざを 知ると言はなくに (石川郎女 巻2・97)
私ン袖を 強う引きもせんくせに 知らんヨ (いっちゃんすかん)

梓^{あすさ}弓 引かばまにまに 依^よらめども 後の心を 知りかてぬかも (石川郎女 巻2・98)
弓を引くごて 私の心を引かるっとなろ あなたのお気持ちにも 添いましょうばって
後々のお心についてにゃ 分かりませんしネ (よかよ ばって心変わりが心配じゃん)

我が里に 大雪降り 大原の 古りにしりに 降らまくは後 (天武天皇 巻2・103)
我が里にゃ 大雪が降ったとばい そっちの古びた里に雪の降っとは
まーだ後じゃろだねえ

わが岡の おかみに言ひて 降らしめし 雪のくだけし そこに散りけむ (藤原夫人 巻2・104)
うちの岡の龍神に言いつけて 降らせた雪が 砕けてそっちに降ったとヨ
(何ば言いよっとネ) ※ 上記(2-103)の天武天皇が藤原夫人に贈った歌にお答えした歌

我が背子を 大和へ遣ると さ夜更けて 暁^{あかつき}露に 我が立ち濡れし (大泊皇女 巻2・105)
我が弟を 大和さん送り返したもんの 夜は深う沈んで
暁の露に 私は立ちつくしたまま 濡れてしもた (徒然^{とぜん}のうなったヨ)

人言を繁み 言^{こちた}痛み 己が世に いまだ渡らぬ 朝川渡る (但馬皇女 巻2・116)
人の噂が煩わしゅうして 私も今までなるばって 渡ったこともなか 朝の川を渡ります

ますらをや 片恋せむと 嘆けども 醜^{しこ}のますらを なほ恋ひにけり (舎人皇子 巻2・117)
立派な男子が 届かん片思いなんのするもんじゃなか ちゅて嘆いてみるばって
見たむなかこん男は そっでん恋してしもうとる 我ながら情けにゃあもんじゃ

家にあれば 筥^けに盛る飯^{いひ}を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る (有間皇子 巻2・142)
家におっときゃ きれーか器に盛る飯も 旅の途中だけん
しよんなかけん 椎の葉に盛った ※「草枕」は、「旅」に掛かる枕詞

近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古^{いにしえ}思ほゆ (柿本朝臣人麻呂 巻3・266)
近江の湖の 夕波に鳴く千鳥よい お前が鳴けば 私の心も しおれてしもうて
昔のことば 思いじゃーて せつのう なっじゃっかネ

※「古」=天智天皇の時代(琵琶湖畔に都があった頃)のこと

むささびは 木末^{こすえ}求むと あしひきの 山の獵師に あひにけるかも (志貴皇子 巻3・267)
ムササビが 梢に登ろうてして 山の獵師に きゃー見つかったばい

※「あしひきの」は、「山」に掛かる枕詞

旅にして もの恋しきに 山下の 赤のそほ舟 沖に漕ぎ見ゆ (高市黒人 巻3・270)
旅しよって 何とはなく恋しか思いをしとっ時 山裾に居った朱塗りン舟が

沖さん漕いで行くトン見ゆる ※「山下の」は、「赤」に掛かる枕詞？

田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にそ 富士の高嶺 雪は降りける (山部赤人 巻3・318)

田子の浦を通過して 眺めのよか処に出てみたりや

真っ白か富士の高嶺に 雪の降り積もつとるヨ

※「田子の浦ゆ」は、静岡県の駿河湾北西部の浜 「ゆ」は、通過地点を表す

あをによし 寧楽の京師は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり (小野老朝臣 巻3・328)

奈良の都は ちょうど爛漫に咲き臭う花のごて 繁栄しとるばい

※「あおによし」は、「寧楽」に掛かる枕詞 寧楽の京師(平城京)

駿なき ものを思はずは 一坏の 濁れる酒を 飲むべくあるらし (大伴旅人 巻3・338)

しよんなかこっぱ思い悩むよりか 一ぴゃ濁り酒どん 飲うだほうがましばい

なかなか 人にとあらずは 酒壺に 成りにてしかも 酒に染みなむ (大伴旅人 巻3・343)

むしろ人間でおるよりか 一層ンこて酒壺になろごたる

そうすれば ずっと酒に浸っておらるってえ

あな醜 賢しらをすと 酒飲まぬ 人をよく見れば 猿にかも似る (大伴旅人 巻3・344)

ああ なんちゅう醜らしか 酒も飲までん 利口かぶつとる奴を ゆうつと見れば

まっで猿のごたたい

世間を 何に喩へむ 朝開き 漕ぎ去にし船の 跡なきごとし (沙弥満誓 巻3・351)

世の中ば 何に例えたるば よかるかい 夜明けの朝早う 港を漕ぎ出した舟の航跡が

何も残つとらんごたるふう (人生行路もそがんふうばい)

愛しき 人のまきてし 敷妙の わが手枕を まく人あらめや (大伴旅人 巻3・438)

愛しい妻が 枕にして寝た 私のこの腕を 枕にする女の 他に誰が おりーろ

※「敷妙の」は、「枕・手本・床・袖」に掛かる枕詞

妹と来し 敏馬の崎を 還るさに 独りし見れば 涙ぐましも (大伴旅人 巻3・449)

妻と通った敏馬の崎を 帰りしな 一人で見たりや 思い出やーて涙の 出てきたバイ

※「敏馬」は、神戸市灘区岩屋 「見ぬ女」の掛詞

妹として 二人作りし 我が山齋は 木高く繁く なりにけるかも (大伴旅人 巻3・452)

妻と二人バリで造った我が家の庭園は 木立も高うなって生い繁ったバイ

君待つと 我が恋ひをれば わが屋戸の すだれ動かし 秋の風吹く (額田王 巻4・488)

あの方を恋しゅうして 待っておれば 我家の戸口のすだれば 動かすとは
ただ秋風ばかり ※「屋戸」(家・住まい・庭) ※額田王が天智天皇を恋慕って贈った歌

風をだに 恋ふるは羨し 風をだに 来むとし待たば 何か嘆かむ (額田王 巻4・489)
風が吹くだけで いらっしゃったと思うくりゃ 待ち焦がるるちゅうとは羨ましか
風にしゃかそがん思えっとなろ 何バ嘆くことンあるきゃ (私にゃ待つ人もおらんテエ)

あま 雨つつみ つね 常する君は 久方の きそのよ 昨夜の雨に 懲りにけむかも (大伴坂上郎女 巻4・519)
雨が降れば出不精になるあなたは いつものことばって 昨夜の雨に懲りて
来てにゃ 下さらんとじゃろネ ※「久方の」は、「天・月・光・雨」に掛かる枕詞

来むと言ふも 来ぬ時あるを 来じと言ふを 来むとは待たじ 来じと言ふものを
(大伴坂上郎女 巻4・527)

あなた様は 「来る来る」ちゆわしたっちゃ 来なさらん時も あるもね
「来ん」ちゆわしたばって ひょっとすれば「来らすかも」ちゆて
期待して待とっとは やめときまっしゅ 「来ん」ちゆて言わずと じゃけん

事もなく 生き来しものを 老いなみに かかる恋にも 我はあへるかも (大伴百代 巻4・559)
なんちゅうこたなし 平凡に生きてきたばって 老いが近まった今
目の覚むるごたる恋に 私ゃ 出会ったとヨ

我が形見 見つつ思ばせ あらたまの 年の緒長く 我も思はむ (笠郎女 巻4・587)
私の思い出の品を 見ながら 私を思ってくださいませ 私も ずっと長う
あなた様を 思い続けますけん ※「あらたまの」は、「年」に掛かる枕詞

我が屋戸の 夕影草の 白露の 消ぬがにもとな 思ほゆるかも (笠郎女 巻4・594)
私の家の庭の 夕影草の白露が やがて消えてしまうごて 身も心も消えてしまうくらい
あなた様のことばかり 思うとっどヨ

恋にもそ 人は死にする 水無瀬川 下ゆ我瘦す 月に日に異に (笠郎女 巻4・598)
恋のために 人は死んだりもするばって 水無瀬川ン伏流水のごて
人知れず 私ゃ瘦せ衰えてしまう 月日を追う毎に

月夜には 門に出で立ち 夕 占 問ひ 足占をせせし 行かまくを欲り (大伴家持 巻4・736)
月の夜にゃ 門口に立って 夕方の占いをしたり 足占いをしたとヨ
あんたん所れ 行こうどもてネ

しろがね 金も玉も 何せむに 勝れる宝 子に及かめやも (山上憶良 巻5・802)

銀も金も玉も 何になろうきゃ どがしこ勝れた宝っちゃ 子どもに及ぶもんな
何もなかるもん

我が園に 梅の花散る ^{ひさかた}久方の 天より雪の 流れ来るかも (大伴旅人 巻5・822)

私の園に 梅ン花が散る 天から雪ン 流れて来っどかにゃ

※「久方の」は、「天・月・光・雨」に掛かる枕詞

^{あまざか}天離かる ^{ひな}鄙に五年 住まひつつ 都のてぶり 忘らえにけり (山上憶良 巻5・880)

遠か地方に五年も 住み続けて 都ン雅な振る舞いも きゃあ忘れてしもた

※「天離る」は、「鄙」に掛かる枕詞 (都から離れた地方)

天地は広しといへど 我がためは 狭くやなりぬる 日月は明しといへど 我がためは照りや給はぬ
人皆か 我のみや然る わくらばに 人とはあるを 人並に 我もなれるを (山上憶良 巻5・892)
天地は広がて言うばって 私にゃ狭うなったっか 日や月は明るかちゅうばって
私のためには照ってくださらんのか 人は皆こがんにゃろか 私にだけこがんにゃろか
運良く人に生まれついて 人並みに私も育ったとに

神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は ^{すめろぎ}皇神の ^{いつく}厳しき国 ^{ことたま}言霊の ^{さき}幸はふ国と語り継ぎ
言ひ継がひけり (山上憶良 巻5・894)

神代の昔から 言い伝えてある 大和の国は 神が威厳持って守る国
言霊が幸を もたらす国ちゆて 語り継ぎ 言い継がれてきやしたと

^{すべ}術もなく 苦しくあれば 出で走り ^い去ななと思えど 児等に ^{きや}障りぬ (山上憶良 巻5・899)
手段も尽きて 苦しゅうして のさんけん 走り出ゃーて 死んでしまおうかと
思うばって 子どもたちの事を思えば そうもできん

若の浦に 潮満ち来れば 濁を無み 葦辺をさして ^{たづ}鶴鳴き渡る (山部宿禰赤人 巻5・919)
若の浦に潮が満ちてくれれば 干濁がなかごてなって
芦ノ生えた岸辺を 鶴が鳴きながら 渡って行きよるバイ

^{おのこ}士やも ^{むな}空しくあるべき ^{よろずよ}万代に 語り継ぐべき 名は立てずして (山上憶良 巻6・978)
男たるもんな ^{むな}空しかね 万代に語り継がれるごたる 名声を上げもせんで よかもんか

ふりさけて ^{みかつき}若月見れば ひと目見し ^{まよひき}眉引 思ほゆるかも (大伴家持 巻6・994)
仰にゃーて 三日月を見れば ひと目見たばかり ばって
あの子のきれーか眉を思い出す

白玉は 人に知らえず 知らずともよし 知らずとも 我し知れば 知らずともよし

(元興寺の僧 卷6・1018)

真珠は 人に知られとらんばって 知られんちゃよかとヨ
我がしゃか その価値を知っとれば 世間の人は 知らんちゃよかと

一つ松 幾代か経ぬる 吹く風の 声の清きは 年深みかも (市原王 卷6・1042)

一本松は どぎゃしこだ 時代ば経てきたもねろ 梢を吹く風の音が
きれーに澄みちぎとつとは 深う歳月を 重ねてきたから じゃろうもん

天の海に 雲の波立ち 月の舟 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ (柿本人麻呂 卷7・1068)

天の海に雲の波が立って 月の舟が星の林に漕ぎ隠るつとが見ゆる

ぬばたまの 夜さり来れば 巻向の 川音高しも 嵐かも疾き (作者不明 卷7・1101)

真っ暗闇の夜がくれば 巻向川の川音が高うなる 山おろしが ひどうなつたっじゃろう

※「ぬばたまの」は、「夜」に掛かる枕詞

西の市に ただ一人出でて 目並はず 買ひてし絹の 商じこりかも (作者不明 卷7・1264)

西の市にたつた一人で出掛けて 見比べもせんで
自分だけで見て 買うてしもた絹は 買い損ないじゃつた

今年行く 新島守が 麻衣 肩のまよひは 誰か取り見む (作者不明 卷7・1265)

今年送られて行く 新しか防人の麻衣ン 肩ンほつれは
一体誰が繕うてやらすとじゃろかい

住吉の 波豆麻の君が 馬乗衣 さひづらふ 漢女を据ゑて 縫へる衣ぞ

(柿本人麻呂 卷7・1273)

住吉の波豆麻の あの方の乗馬服は 中国渡来の女性を雇うて 縫わせたっですばい

君がため 手力疲れ 織りたる衣ぞ 春さらば いかなる色に 摺りてば良けむ

(作者不明 卷7・1281)

あなたのために 手の力もきゃーくたびれて 織った着物ばって 春になったらろば
どがん色に摺って染めたる よかりーろ

福の いかなる人か 黒髪の 白くなるまで 妹が音を聞く (作者不明 卷7・1411)

何と幸せな人じゃらすどかい 白髪になるまで 妻の声を 聞かせる ちゅうことは

昼は咲き 夜は恋ひ寝る 合飲木の花 君のみ見めや 戯奴さへに見よ (紀女郎 卷8・1461)

昼は咲き 夜は誰かと恋して寝る合飲の花よい 家の主だけが見つとじゃか
風流な若っか下部の お前たちも 見るが良かり

暇^{いとま}無^なみ 来^きざりし君に ほととぎす われかく恋ふと 行きて告げこそ

(大伴坂上郎女 卷8・1498)

暇^{いとま}な^なかちゆて 訪^まねて来^きらっさん あの^{あの}人に ホトトギス^よい 私が^{わが}こが^んん
恋^こい焦^{あせ}がれと^とつとを 行^いたて伝^つえてくれろ^ね

夏^{なつ}の野^のの 繁^{さか}みに咲^さける 姫^{ひめ}百合^のの 知^しらえぬ恋^こは 苦^くしきものぞ

(大伴坂上郎女 卷8・1500)

夏^{なつ}の夜^のの繁^{さか}みに ひっそり咲^さく姫^{ひめ}百合^のが 人^{ひと}に知^しられん^ごて あの^{あの}人に知^しって^もらえ^ん
私^{わが}の恋^こは苦^くしかと^よ

夕^{ゆふ}されば 小^こ倉^{くら}の山^のに 鳴^なく鹿^かは 今^こ夜^よは鳴^なかず い寝^いにけらしも (岡本天皇 卷8・1511)

夕^{ゆふ}暮^{くれ}れになれば 小^こ倉^{くら}山^ので鳴^なく鹿^かが 今^こ宵^よは鳴^なかんと^ん
も^もう夫^お婦^ふばりい 寝^いた^っじゃろ^{かい}

言^{こと}繁^{しげ}き 里^{さと}に住^すま^ずは 今^こ朝^あ鳴^なきし 雁^{かり}にたぐひて 行^いかましものを (但馬皇女 卷8・1515)

口^{くち}やかまし^か里^{さと}なんかに住^すんどらん^じゃ^った^ちゃ
今^こ朝^あ鳴^なや^た雁^{かり}と連^つの^うで 飛^とう^では^って^けば 良^よか^った^てえ^ま

彦^{ひこ}星^せは 織^お女^めと 天^{あま}地^ちの別^{わか}れし時^{とき}ゆ いなむしろ 川^かに向^むき立^たち 思^{おも}ふそら 安^{やす}けなくに 青^あ波^{なみ}に
望^{のぞ}みは絶^たえぬ 白^{しろ}雲^{うみ}に 涙^{なみだ}は尽^つきぬ かくのみや 息^{いき}づき居^いらむ かくのみや 恋^こひつ^つあ^らむ
さ丹^に塗^ぬりの 小^こ舟^{ふね}もがも 玉^{たま}巻^まきの ま^ま櫂^{かい}もがも (山上憶良 卷8・1520)

彦^{ひこ}星^せは織^おり姫^{ひめ}と 天^{あま}と地^ちが別^{わか}れた昔^{むかし}から 天^{あま}の川^かに向^むかい合^あうて立^たっ^とら^ず
恋^こする心^{こころ}は若^{わか}こうして 嘆^{なげ}く胸^{むね}の内^{うち}は落^おち着^かん
青^あか波^{なみ}で 向^むこう岸^きが見^みえん^ごてな^った 白^{しろ}雲^{うみ}が隔^へてた 遙^{とほ}かかな^たに
涙^{なみだ}は溜^{ため}れてしもた ああ こが^んも溜^{ため}息^{いき}つ^いてお^らり^ゆう^{かい}
こが^んも恋^こ焦^{あせ}が^れてお^らる^るも^んか 赤^{あか}う美^うし^ゆう塗^ぬられた小^こ舟^{ふね}が欲^ほしか
玉^{たま}を巻^まき付^けた 櫂^{かい}はな^かも^んじ^ゃろ^{かい}

彦^{ひこ}星^せし 妻^{つま}迎^{むか}へ舟^{ふね} 漕^こぎ出^でらし 天^{あま}の川^か原^{はら}に 霧^{きり}の立^たてるは (山上憶良 卷8・1527)

彦^{ひこ}星^せが妻^{つま}を迎^{むか}える舟^{ふね}を 漕^こぎ出^でした^そう^なも^んじ^ゃん
天^{あま}の川^か原^{はら}に 霧^{きり}立^たっ^とつ^とは ^みず^しぶ^き ばい

萩^{はぎ}の花^{はな} 尾^お花^{はな} 葛^{くず}花^{はな} なでしこの花^{はな} を^をみ^なへし また藤^{ふじ}袴^{はかま} 朝^あ顔^{かほ}の花^{はな} (山上憶良 卷8・1538)

秋^{あき}の野^のに咲^さく 七^{しち}草^{そう} 萩^{はぎ} すすき 葛^{くず} 撫^な子^こ お^おみ^みな^なえし そして藤^{ふじ}袴^{はかま} 朝^あ顔^{かほ}

夕^ゆ方^うづ^くよ 心^{こころ}も^もし^のに 白^{しろ}露^るの 置^おくこの庭^{にわ}に 蟋^こ蟀^{おろ}ぎ鳴^なくも (湯原王 卷8・1552)

秋^{あき}夕^ゆ方^うン^づ月^げが^が出^でて 心^{こころ}も憂^{うれ}い^し萎^しる^るご^て 白^{しろ}露^るの降^ふりと^とる^こん^に庭^{にわ}で 秋^{あき}の虫^{むし}が鳴^なきよ^る

あわゆき 沫雪の ほどろほどろに 降り敷けば 平城の京し 思ほゆるかも (大宰帥大伴卿 卷8・1639)
太宰府に 沫雪がうっすらと降り積もっとつとを見れば 奈良の都が思い出さるる

我が岡に 盛り咲ける 梅の花 残れる雪を まがへつるかも (大宰帥大伴卿 卷8・1640)
私の岡に 今を盛りに咲く白梅の花と 残雪を見間違えてしもたバイ

今日降りし 雪に競ひて 我がやどの 冬木の梅は 花咲きにけり (同上 卷8・1649)
今日降った雪に 負きゆうみゃどもて 私の宿ン 冬枯れン梅の木が 花バ咲かせたっソ

ひさかたの 月夜を清み 梅の花 心開けて 我が思へる君 (紀少鹿女郎 卷8・1661)
空遠くまで輝く 月夜が清らかだけん 夜開く梅ン花ンごて 心も晴々としとる
私がお慕いしとるあなた ※「ひさかたの」は、「天・月・光・雨」に掛かる枕詞

さ夜中と 夜は深けぬらし 雁が音の 聞ゆる空に 月渡る見ゆ (柿本人麻呂歌集 卷9・1701)
もう夜が更けたっじゃろ 雁が鳴きながら飛ぶ空に 月も低うなりかけとらす

はつせ 泊瀬川 夕渡り来て 我妹子が 家のかな門に 近づきにけり (柿本人麻呂歌集 卷9・1775)
はつせ 泊瀬川を夕方に渡ってきて ようよして 愛しか妻の家ン門に近づいた

旅人の 宿りせむ野に 霜降らば 我が子に羽くくめ 天の鶴群 (作者未詳 卷9・1791)
旅人が宿る野に もし霜が降るなら どうか我が子を 羽で包んでくだっせ
天を飛ぶ 鶴の群れたちよい

しほけ 潮気たつ ありそ 荒磯にはあれど 行く水の 過ぎにし妹が 形見とぞ来し
(柿本人麻呂 卷9・1797)

潮煙ン立つ荒涼たるこの磯に 亡くなった妻の形見と思うてやって来やした

ひさかた 久方の 天の香具山 このゆふへ 霞たなびく 春立つらしも (作者未詳 卷10・1812)
天の香具山に こん夕暮れ 霞のかかっとる もう春になったばいナ

梅の花 降り覆ふ雪を 包み持ち 君に見せむと 取れば消につつ (作者未詳 卷10・1833)
梅の花を覆うごて 降った雪を 包うで持ち戻って あの人の 見しゅうどもとるばって
取ったかたっばしから 消ゆっちゃもね

かすみ 霞立つ 春の長日を 恋ひ暮らし 夜も更けゆくに 妹も逢はぬかも (作者未詳 卷10・1894)
かすみ 霞ン立つ春の長か一日を 恋しか思いで過ごして 夜も更けてきたて
まこて アン娘が現れてくれんかね

吾^あが為と 織^{たなばたつめ}女の そのやどに 織^{しろたえ}る白栲^{しろたえ}は 織^{はくふ}りてけむかも (柿本人麻呂歌集 卷10・2027)
私^{はくふ}のために織^{はくふ}姫^{はくふ}が 家^{はくふ}で織^{はくふ}っとるちゅう 白^{はくふ}布^{はくふ}はもう織^{はくふ}り上げらしたろかい

君^{はた}に逢^{しろたえ}はず 久^{ころも}しき時^{あか}ゆ 織^{しろたえ}る服^{しろたえ}の 白^{あか}栲^{しろたえ}の衣^{しろたえ} 垢^{あか}付^{しろたえ}くまでに (柿本人麻呂歌集 卷10・2028)
あ^{あか}なたに逢^{しろたえ}わでにゃ ず^{しろたえ}っと織^{しろたえ}り続^{しろたえ}けとる白^{しろたえ}妙^{しろたえ}の衣^{しろたえ}は もう垢^{しろたえ}ン付^{しろたえ}いたごてな^{しろたえ}った

天^{かじ}の川^{かじ} 楫^{かじ}の音^{かじ}聞^{かじ}こゆ 彦^{たなばたつめ}星^{たなばたつめ}と 織^{こよい}女^{こよい}と 今^{こよい}夜^{こよい}逢^{こよい}ふらしも (作者未詳 卷10・2029)
天^{かじ}の川^{かじ}に 楫^{かじ}の音^{かじ}の聞^{かじ}こゆる 彦^{たなばたつめ}星^{たなばたつめ}と織^{こよい}り姫^{こよい}が 今^{こよい}夜^{こよい}逢^{こよい}わすとちゅうた^{こよい}ネ

この夕^{ゆうへ} 降^{ゆうへ}りくる雨^{ゆうへ}は 彦^{ひさ}星^{ひさ}の 早^{ひさ}や漕^{ひさ}ぐ舟^{ひさ}の 櫂^{かい}の散^{かい}りかも (作者未詳 卷10・2052)
この夕^{ゆうへ}方^{ゆうへ}降^{ゆうへ}る雨^{ゆうへ}は 彦^{ひさ}星^{ひさ}が急^{ひさ}えで漕^{ひさ}いどる舟^{ひさ}ン櫂^{ひさ}の滴^{しずく}じゃか^{しずく}ろかい

萩^{ひさ}の花^{ひさ} 咲^{ひさ}けるを見^{ひさ}れば 君^{ひさ}に逢^{ひさ}はず ま^{ひさ}こも久^{ひさ}に な^{ひさ}りにけ^{ひさ}るかも (作者未詳 卷10・2080)
萩^{ひさ}の花^{ひさ}の咲^{ひさ}ゃーと^{ひさ}つとを見^{ひさ}れば あ^{ひさ}の方^{ひさ}に会^{ひさ}い申^{ひさ}さんま^{ひさ}ま
ま^{ひさ}こて 長^{ひさ}う経^{ひさ}ったも^{ひさ}んじゃあ^{ひさ}るば^{ひさ}い

思^{しぐれ}はぬに 時^{しぐれ}雨^{しぐれ}の雨^{しぐれ}は 降^{しぐれ}りたれど 天^{つくよ}雲^{つくよ}はれて 月^{つくよ}夜^{つくよ}さ^{つくよ}やけし (作者未詳 卷10・2227)
思^{しぐれ}いがけん時^{しぐれ}雨^{しぐれ}が降^{しぐれ}ったば^{しぐれ}って いつ^{しぐれ}の間^{しぐれ}にじゃ^{しぐれ}い 天^{つくよ}雲^{つくよ}がのう^{つくよ}な^{つくよ}って 月^{つくよ}夜^{つくよ}にな^{つくよ}った

秋^{あき}萩^{あき}の 咲^{あき}き散^{あき}る野^{あき}辺^{あき}の 夕^{あき}露^{あき}の 濡^{あき}れつ^{あき}つ来^{あき}ませ 夜^{あき}は更^{あき}けぬとも (作者未詳 卷10・2252)
秋^{あき}萩^{あき}が咲^{あき}いては散^{あき}る 野^{あき}辺^{あき}の夕^{あき}霧^{あき}に た^{あき}とえ濡^{あき}れた^{あき}っちゃ 来^{あき}て下^{あき}さいませ
ど^{あき}がん 夜^{あき}が更^{あき}けた^{あき}っちゃ よ^{あき}かです^{あき}けん

※「来ませ」(お出でなさいませ) 天草方言「来ませ・来なさせ・お出でませ」

わ^{あわゆき}が背^{あわゆき}子を 今^{あわゆき}か今^{あわゆき}かと 出^{あわゆき}で見^{あわゆき}れば 沫^{あわゆき}雪^{あわゆき}降^{あわゆき}れり 庭^{あわゆき}もほ^{あわゆき}どろに (作者未詳 卷10・2323)
あ^{あわゆき}の方^{あわゆき}がいら^{あわゆき}っしゃ^{あわゆき}つとば 今^{あわゆき}か今^{あわゆき}かと待^{あわゆき}って 外^{あわゆき}に出^{あわゆき}てみ^{あわゆき}たりゃ
沫^{あわゆき}雪^{あわゆき}が庭^{あわゆき}にう^{あわゆき}っすら^{あわゆき}ーと 降^{あわゆき}り積^{あわゆき}も^{あわゆき}と^{あわゆき}ります

た^いらちね^いの 母^いが手^い放^いれ か^いくば^いかり す^いべな^いきこ^いとは い^いまだ^いせな^いくに (作者未詳 卷11・2368)
母^いの手^いから離^いれて こ^いがん どう^いしょう^いもな^いか思^いいを した^いこ^いとは な^いか^いった^いとに

※「たらちねの」は、「母」に掛かる枕詞

た^いらちね^いの 母^いに障^いらば いた^いづらに 汝^いも吾^いも 事^いのなる^いべき (作者未詳 卷11・2517)
母^いに遠^い慮^いして 気^い兼^いねしてぐ^いずぐ^いずし^いとれば あ^いんた^いも私^いも 一^い緒^いにな^いられん^いもね

誰^たれそ^たこの わ^たが宿^た来^た呼^たぶ たら^たちね^たの 母^たに嘖^たはえ 物^た思^たふ吾^たを (作者未詳 卷11・2527)
誰^たネ 私^たの家^たに來^たて呼^たぶとは 母^たにお^たごら^たれて (恋^たがバ^たして) 私^たゃし^たよげ^たと^たつとよ

たらちねの 母に知らえず 我が持てる 心はよし糸 君がまにまに (作者未詳 巻11・2537)
母にも知らせとらんばって 私の気持ちはもう決めとっとヨ
あんだの心のままにしてよかとよ

しん 験なき 恋をもするか 夕されば 人の手まきて 寝らむ児故に (作者未詳 巻11・2599)
どうしようもなか 恋をしたもんじゃあるばい
よさりになれば 他の人ン手枕で寝とっとじゃろで (あん娘じゃろ まこて)

伊勢の^{あま}海人の 朝な夕なに ^{かず}潜くといふ 鮑の貝の 片思ひにして (作者未詳 巻11・2798)
伊勢の^{あま}海女が 朝夕の飯の しゃーに 潜って取るちゅう あわびのごて
片思いのままで ※「潜く」は、水中に潜る 天草方言「かづく」

恋ひ恋ひて 後も逢はむと ^{なぐさ}慰もる 心しなくは 生きてあらめやも (作者未詳 巻12・2904)
恋焦がれて 後でまた 逢わるっどじゃっか
己を慰むる心が なからんば とても生きちゃ いかれそうになかもね

^{うつせみ}空蝉の 常の言葉と 思へども 継ぎてし聞けば 心惑ひぬ (作者未詳 巻12・2961)
世間の決まり文句ちゃ 思うばって 聞かされ続ければ やっぱり心は迷うとヨ
※「空蝉の」は、「世間・世間の人・命」に掛かる枕詞

たらちねの 母が養う 蚕の^{まゆごもり}繭隠り いぶせくもあるか 妹に逢わずして
(作者未詳 巻12・2991)
母が飼うとる蚕が 繭に^{こも}隠って 身動きできんごて 私も 塞いだ心が晴れん
あの娘に会えん もんじゃって ※「たらちねの」は、「母」に掛かる枕詞

あしひきの 山より出づる 月待つと 人には言ひて 妹待つ我を
(作者未詳 巻12・3002)
山から出る月を 待とっと ちゆて人にや言うたばって 私ゃ あん娘を 待とっと
※「あしひきの」は、「山」に掛かる枕詞

^{しき}磯城島の ^{やまと}日本の国に 二人あり とし思はば 何か嘆かむ (作者未詳 巻13・3249)
この日本の国に 私の思うあの人 が もしも 二人おらすとなろば
私ゃこぎゃんも 嘆かんちゃ よかつじゃばってま
※「磯城島の」は、日本(大和)の枕詞

今更に 恋ふとも君に 逢はめやも 寝る夜をおちず 夢に見えこそ (作者未詳 巻13・3283)
今更恋慕うたっちゃ あなた様にや逢えんとじゃろう
そんなろ 毎夜欠かさず 夢に出てきてよ

足柄の 箱根の山に 粟蒔きて 実とはなれるを 逢はなくもあやし (作者未詳 巻14・3364)
足柄の箱根の山に 粟を蒔ゃーて実が結び 二人の仲も しっくり結ばれたとに
逢わない (粟がない) ちゅうのは なんちゅうこつかい

伊香保ろの やさかの堰^{いで}に 立つ虹の 顕^{あらは}ろまでも 共寝をさ寝てば (作者未詳 巻14・3414)
伊香保の八坂の堰に立つ虹が あられるまでは (人に知られるまでは)
お前と一緒に こがんで ずうっと共寝しとこうごたるネ

恋しければ 来ませわが背子 垣^{やぎ}つ柳^{うれ} 末摘みからし われ立ち待たむ (作者未詳 巻14・3455)
恋しかとなろば お出でなさいませ 愛しかあなた 垣根の柳の枝先が
きゃー枯れてしまうごて 摘み切りながら 私ゃ立ち続けて お待ちしとりますとヨ
※「来ませ」は、おいでなさいませ 天草方言「来ませ・お出でませ」

妹^ぬが寝る 床のあたりに 石くぐる水に もがもよ入りて 寝まくも (作者未詳 巻14・3554)
彼女が寝とる床の辺りに 岩間をくぐる水になっと なれたろよかてなあ
ずうっと もぐりこうで 一緒に寝^ぬっとこれ まあ
※「ぬる」は、寝る 天草方言「ぬる」

愛^{かな}し妹を 何処行かめと 山菅^{やますげ}の 背向^{そがひ}に寝しく 今し悔しも (作者未詳 巻14・3577)
愛しい妻じゃばって どこさんはってくわけでもなか と思うて
山菅^{やますげ}の葉のごて 背中合わせで寝てしもうた事が 今じゃ悔やまれて のさん
※「山菅の」は、「背向」に掛かる枕 詞

このころは 恋ひつつもあらむ 玉櫛^{たまくしげ}笄 あけてをちより すべなかるべし
(狭野弟上娘子 巻15・3726)

今はまーだ 顔を見とるけん よかばって 夜が明ければ
あなた様は じきに はってかす 私ゃ どがんしょうはなか じゃっかネ

思ひつつ寝れば かもとなぬばたまの 一夜もおちず 夢^{いぬ}にし見ゆる (同上 巻15・3738)
あなたば思いながら 寝^ぬるけんじゃろかい
一夜も欠かさず ずっとあなた様を 夢にみますとヨ ※「いぬ」(夢)

橘^{たちばな}の 寺の長屋に 我が卒寝^いし 童女^{うなぬはなり}放髪は 髪上げつらむか (作者未詳 巻16・3822)
橘寺の長屋に 私が連れ込いで 寝たっじゃって まーだ髪も結うとらん あん娘は
もう 髪上げする年頃にだ なったろうかにゃ
※「童女放髪」(髪を伸ばしたままにした15歳くらいまでの娘)

醬^{しょうす}酢に ひるっか 蒜^{あし}搗き合てて 鯛^{たい}願ふ 我にな見えそ 水葱^{なず}の 羹^{あつもの} (長意吉麻呂 巻16・3829)

酢醬油に 野蒜^{のびる}を 搗き混ぜた垂れ^たを作^つて 鯛を食いたか ともとつとに
こん俺さまの目の前から 消えてくれ 旨もなか 水葱^{すいもん}の吸物 なんの

射ゆ鹿を 認^しぐ川辺の 和草^{にこくさ}の 身^たの若かへに 共寝^{きね}し子らはも (作者未詳 巻16・3874)
手負いの鹿ん 後を追うとつて 川辺の柔らか草むらで 我が身も若っか頃
抱いて寝た娘のことが 懐かしゅう俣ばるる

梅の花 いつは折らじと いとはねど 咲きの盛りは 惜しきものなり (大伴書持 巻17・3904)
梅の花は 何時折るか 別段 厭う訳でもなかばってん
咲き盛りに そのまま見とるちゅうとも 実に 惜しか気のする

鶯^{ういす}の来^き 鳴く山吹 うたがたも 君が手触れず 花散らめやも (大伴池主 巻17・3968)
うぐいすが来て鳴く山吹は まさかあなた様が 手も触れんうちに
散ったりは せんどもんネ

港風 寒く吹くらし 奈^{なこ}の江に 妻呼び交し 鶴^{たづさわ}多に鳴く (大伴家持 巻17・4018)
海風が寒う 吹いとるごたる 奈^{なこ}呉の入江で 鶴の夫婦が 互いに呼び合うて
ぎょうさん 鳴やーとる

雪の上に 照れる月夜に 梅の花 折りて贈らむ 愛しき児もがも (大伴家持 巻18・4134)
雪の上に 月光の輝く夜に 白か梅の花を折って贈るごたる みぞか娘は おらんかネ

丈夫^{ますらお}は 名を立つべし 後の代^よに 聞き継ぐ人も 語り継ぐがね (大伴家持 巻19・4165)
男子たるものは まさに名を立つるべきである 後代その名を聞く人々が
またその名を 人々に語り伝えるごて そうありたかもんだ

新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いやしけ吉事^{よごと} (大伴家持 巻20・4516)
新しか年の初めと立春とが きゃー重なった きゅう降る雪のごて
まだまだ良かことン重なれ

 トップページへ戻る